

嬉泉の新聞

- ・嬉泉の新聞／第23号／1992年（平成4年）11月発行（年3回発行）
- ・発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1-30-9（〒156）
TEL 03-3426-2323
- ・発行人＝石井哲夫 ・編集人＝友田篤

日本臨床心理士会

日本臨床心理士会・代表幹事、上智大学文学部教授

小川捷之

“こころの専門家”ともいわれる「臨床心理士」の資格制度が我国でもようやくに緒についたことをご存知であろうか。

平成元年（1989年）に、この臨床心理士を生み出す日本臨床心理士資格認定協会（木田宏会頭）が文部省より財団法人として正式に認可され、現在までに約3,500名の臨床心理士が誕生している。

そして、この資格取得者のユニオンでもある「日本臨床心理士会」がその翌年、平成2年（1990年）に河合隼雄国際日本文化センター教授を会長として発足した。この会は、臨床心理士の相互の関係を密にし、その資質と技能の維持向上をはかることを目的としている。すなわち、全国を9つの地区に分け、それぞれの地区に臨床心理会を作り、まずは研修活動を活発に展開し、真の意味の専門性を創り出そうとしている。考えてみれば、職業人としてのこころの専門家という概念は、欧米に比べ、我国ではなじみが薄く、資格制度という外的な枠組がようやくにできたからといって、すぐさまそれが世間に通用するわけでもないのである。我々が今、ここで取組まなければならない課題は、“こころの専門家”としての我々の存在を世の中の人すべてに理解してもらうよう、我々の実力を身につけることだと考えている。

そこで、我々がまずおこなうことにしたことは「全国大会」を開催し、我々自身の横の連帯をはかり、当面の課題を相互に確認することである。会期は11月28日(土)、29日(日)の両日で、会

場は、横浜山下町の神奈川県民ホールである。第1日目は、公開講演会とした。講師は東京大学の村上陽一郎教授と河合隼雄本会会長である。テーマは、「現代人と心の問題」ということで、お二人は、それぞれ「本当の自分」と「自己実現再考」ということで話されることになった。時間は、午後1時～4時で、そのあと、分科会に別れて研修会をおこなう。小生が、企画・司会をするセッションは、福祉心理臨床における臨床心理士の役割－治療・療育活動での連携の発展求めて－というもので、話題提供は厚生省児童家庭局、柏女霊峰氏、大正大学カウンセリング研究所、村瀬嘉代子氏、神奈川中央児相の植松治彦氏である。場所は、同じく県民ホールの小ホールで、時間は公開講演会終了のあと、4時30分から7時までである。

臨床心理士が福祉の領域の中で、どのような基本姿勢のもとに活動すべきなのか、他職種との連携の中で我々の独自性をどう打出してゆくべきか、「福祉心理臨床」という専門領域をどう確立していったらよいのか、討議したいものと思っている。このシンポジウムを機に福祉心理臨床への未来が少しでも展開できたら嬉しい限りである。多数の関係者の参加を期待するしだいである。

（参加の問い合わせは、

山王教育研究所 03-3775-8155）

社会福祉施設のこれからをどうしたら良いかと言う事をしばしば議論する事がある。それは、今社会福祉施設が転換期にあるにも拘らず、一歩も新しい方向に踏み出せずにいるからである。これは、社会福祉施設における積極的な指導性を示し得る体制が出来ていないからであろう。少なくとも今の施設団体は、措置費に依存した団体であるから実質的な施設経営の独自性に欠けていることを示しているであろう。

行政も社会福祉改革以来民間施設を措置費や施設整備費の手前会計監査を厳しくして施設が措置した利用者以外を対象とする事業を行う事に関して、かたくなな指導をしているが、一方において、できるだけ民間の自主的経営力を育てようと考えている。これは、明らかに矛盾する事である。これ以上国から資金を出す事が出来なければ、せめて法人の経営力を発揮できるように政策転換を行っていく事が望まれるのである。

一方法人にしてもそれなりに自主的にいろいろな経営努力を続けてきたが、何としてもこのような施設経営が続けば、能力のある職員の確保が難しくなる。民間社会福祉施設の職員が半ば公務員のよ

うにきまっただ事のみをしていれば収入に困らないと言う気持ちに傾いてしまい、誰一人として、ボランティア的な気持ちで経営に協力しなくなっていく事であろう。

社会福祉施設におけるボランティアを育てていくためには、親などの家族や地域の人たちに注目していかなければならない。障害児の施設などの建設に当たっては、親の会が募金活動や労力の提供をするのが当たり前になっている。現在の社会福祉の理念は、国や社

施設経営の創造性(その十四) 石井哲夫

会側における保障の責任がある事が広く共通の見解になっている。

親のわが子に対する気持ちや社会的な通念が親の献身的な社会活動となつて現れるのであろう。こうした親の気持ちを社会福祉施設に導入していく事をつとめる事によって、施設職員の社会福祉施設処遇の考え方が変わってくる事になるのである。少しでも多くの人たちにその苦労がわかるようになってきたときこそ社会福祉施設の再生が期待できるのではなからうか。

その上に立って、親や地域社会と積極的に連携出来る施設職員の再教育が望まれるのである。今私

が考えている事は、従来の社会福祉施設職員とは、異なった施設経営に参画できる新しいタイプの職員を養成する事である。これは、社会福祉現場と社会福祉教育側の協同事業であるが、とりあえず社会福祉施設で行わなければならない。その異なったタイプの社会福祉施設職員とは、まず施設内処遇の事がよくわかった上で大局的に社会福祉施設を考え、冷静に社会福祉関係者を見つめ根気よく段階的に施設運営の実践に携われる人

でありこれを社会福祉士によって代表される社会福祉のマネージメントやコーディネーションに当たる職員の事である。ただ今のような制度では、前述したような人を得る事が極めて困難であろう。

社会福祉施設の運営の責任をとるという立場に立つと、対内的な処遇への気配りだけでも大変な事であるが、それは、次第に若手の現場の責任者が育ってくるにつれて、少しずつ楽になってくる。しかし施設外の情勢を考えながら施設の舵取りをする事は、なかなか他人に助けてもらえないのである。施設を地域社会的な立場をふま

えて舵をとることは、施設内処遇の能力とは一致しないので困るのである。当分は、施設内外の双方に目配りをしながら自己分裂に耐えて、社会福祉施設における新しい専門性として開発して後継者を育てていかなければならないと思っている。

いずれにしろこのような施設経営の仕事は、単なるビジネスで行われるものではない。施設という人間に関わりながら自分も生活の苦労を重ねていく事であり、その中で生活の設計を行う事ができるようになるという経営力の獲得なのである。そのためには、やはり利用者援助の現場経験を着実に重ねながら社会福祉の長期的な広い価値に関わる取り組みを行っていく事であろう。

そこには必ずと言ってよい自己の利用者処遇への確信が存在しているものである。つまり何を大切に考えたらよいかと言う事がわかっていくものである。

そこには、上意下達的な行政や政策への安易な妥協や、本質を問わない他国の物まね的な処遇を許してはならないと言う専門性の厳しさも必要になってくることであらう。

私たちの

うしろ

須藤福祉センター各事業所からの報告

高島平五丁目福祉園の療育

※今回は、「ひかりのタイムス」編集長の山岸さんが金沢信一福祉園園長代理にインタビューしてきたものをレポートします。

山岸「福祉園の指導理念・方針をお聞かせください。」

金沢「高島平は通所施設なので、通所している短い時間に意味のある指導をしないとなかなか効果がでてきません。だから、そう言う意味では袖ヶ浦とは違った生活リズムが求められますが、人間関係の形成や選択的作業指導を通して意欲を養う指導は袖ヶ浦と変わりません。」

何かを教育してやろうとか、訓練してやろうということよりも、まずその人が自分のペースで人と向き合い自分を現すことが出来ればよいと思います。

高島平には、嬉泉の他の事業所にはいない肢体不自由の人もあります。視覚障害の人もあります。障害

が重複している人もいます。それらの人たちのために、嬉泉の受容的交流療法を実践しています。」

山岸「自閉症とかはいるんですか？」

金沢「自閉症・知恵遅れ・脳性麻痺、それらが重複している人もいます。しかしどんな障害をもっていても人間としての重さは同じだし、みんなそれぞれ自分という状況を抱えているけど、深く関わって援助をしていく意味では同じだと思っています。」

山岸「療育していく上で介護をすると思うのですが。」

金沢「排泄とか、食事とか、体温調節とかなかなか大変です。重たい子供がいて、腰が疲れます。下河辺先生という整形外科の先生に腰痛体操を教わりました。」

それに、肢体不自由児・者の指導としてABC体操を教わりました。社大の中島先生には動作法を教わりました。」

山岸「ABC体操と動作法は効果ありますか？」

金沢「ABC体操は肢体不自由の接近を可能にします。動作法は、立てない子が立てるようになりました。それはほんの数秒のことですがバランスをとって立てるようになりました。」

山岸「来年開設する授産所の構想は？」

金沢「石井所長の元で、イメージを具体化するための検討をしているところ。」

山岸「これから何をやってみたいですか？」

金沢「よい実践はまだまだ出来ているとは思えないので、よりよい実践を行って行きたいです。」

山岸「親御さんとのコミュニケーションはどうしているんですか？」

金沢「通所施設なので大事なことです。コミュニケーションをよくしていこうと努力しています。」

山岸「スポーツ大会をやったと聞きますが。」

金沢「板橋区のスポーツ大会に参加しました。」

山岸「最後になりますが、地域との交流はどう取り組んでいますか？」

金沢「のびろや子研では、バザーなどで地域と盛んに交流していますが、高島平ではまだそこまで行っていない。11月に秋祭りに参加しますが、それがきっかけになればいいと願っています。」



職員の思い

めばえ学園の

厨房を担当して

樋口 美津子

今年、めばえ学園の係の仕事として、初めて『厨房』を担当することになりました。いろいろな仕事がありますが、その中の一つに『献立を考える』という仕事があります。私自身、食べることはもちろん料理をすることも好きなのですが、給食の献立となると、又話しは別です。最初は「どうしたものか」と思い、取り敢えず、皆が食べやすいものを考えていました。しかし、そのうち、「こういうのはどうかな、食べてくれるといいな、よし、今度の新メニューはこれだ!」と意気揚々と考えるようになりました。

しかし、現実には厳しいもので、私の所属するクラスのお子さんはあまり、食べてくれません。実際給食の時に、「これはおいしいよ」と勧めてみても、見向きもされないと、さっきまで意気揚々としていたのが、意気消沈に変わって

きます。

それでも、他のクラスのお子さんが食べてくれた、と聞くと「良かった」と本当に心からホッとします。それから、私のクラスのお子さんが食べてくれない時でも、「他のクラスのお子さんは食べてくれたに違いない」と思いながら、保育が終わった後で、必ず、他のクラスの先生に「今日はどうでしたか?」と聞いています。「食べていたわよ」と言われると、「よし、今度は、これにしてみよう」と思ったりするのですが、「あまり、食べてなかったわ」と言われた時は、「やっぱり、もう少し、考えなおそう。無理なのかな、でも、食べてくれるかもしれないし」と気持ちを取りなおしています。『献立を考える』ということを通



して、私なりに前向きにお子さん達に関わっていかたいと思います。

(子どもの生活研究所
めばえ学園指導員)

四年目の秋

高橋 望

ひかりの学園に就職してから、ようやく四回目の秋を迎えています。ようやくという実感が強いのは、私にはこの仕事を何年続けようという目標があるからです。早くその目標が達成できないかと、月日がどんどん流れて〇年目にならないかと願っているからです。

とこう書けば、まるで嫌々仕事をしているようですが、とんでもありません。いつも陰になり、日向になり支えてくれる嬉泉の仲間——先輩、後輩を含めて、それから保母指導員だけでなく他の職種の人を含めて——に、心から感謝しています。そして誰より、年下でたいした人生経験もないこんな私にお付き合いしてくれる利用者みなさんに、本当にありがたいと思っています。

利用者のみなさんの気持ちをもっとわかって、パニックを起こしている時や、うまく解決できずに困っ



ている時にも、きちんと対応して支えられる存在になりたいと願っています。が、なかなか思うようにいかず自分のふがいなさに落ち込むこともしばしばです。また、相手になかなか想いが伝わらず、じれったくてイライラしてしまい素直な目で見つめ返されて、はっとすることもあります。七転八倒しながらも、一日に何度かは思いっきり笑える——みなさんのおかげでそんな楽しい毎日を送っています。

この仕事が自分に向いているとも、何か特別のすばらしいことができるとも思っていないませんが、今は利用者みなさんと過す時間を大切にしていきたいと思っています。

(袖ヶ浦ひかりの学園指導員)

地域に支えられて

地域の仲間として

袖ヶ浦市社会福祉協議会

齊藤 博文

袖ヶ浦市社会福祉協議会では本年度、ボランティアセンターを開設し、ボランティアの育成を行なっております。その事業の一環として、袖ヶ浦のびろ学園で「高校生ボランティアワークキャンプ」(二泊二日)を企画したところ、快くお引受け下さり、学園の皆様の熱心な協力により有意義に終了することができました。

参加した高校生六名は、はじめのうちは自分が持っていた「自閉症児」のイメージとは異なっていた様子で困惑の色を隠せませんでした。しかし、学園の先生のアドバイスにより、たちまち若い感性が発揮されて驚くほど元気よく、そして純真に子ども達と一緒に遊ぶことができました。

この事業終了後に、担当していた私は、ホッと胸をなでおろすと同時に、楽しさが大きかったあと

の寂しさを感じていました。すると、ある日ワークキャンプに参加していた高校生が、「またのびろに行きたい」と事務所にやってきました。驚きとうれしさの中で、参加者の心に留まったものの大きさを感じました。

ともすれば、地域から離れがちな「施設」ですが、「地域」は想像以上に施設とのコミュニケーションを求めています。今後は、ボランティアをはじめ多くの市民が様々な思いを胸に学園を訪ねることが予想されますが、同じ地域の仲間として、お互いに育ち合うためによりしくお願いいたします。



おしまいに、二回目ののびろ学園訪問を終えた高校生は帰り際にこう言いました。
「今度は友達を連れてきます。」

ワークキャンプに参加して

君津高校三年

鶴岡 亜希子

この度はワークキャンプに参加させていただいてどうもありがとうございました。『のびろ学園』で感じたことは、職員の方々がとても穏やかで子ども達を大きく暖かく見守っている様子が窺われたことです。本当に怒るというものとは無縁のような人たちなので子ども達もあそこまでなれたんですね。

私は自閉症というのはS君のようにおとなしい子ばかりなのかと思っていました。実際は奇声をあげたり、活発に動き回る子も多かったんです。でも、お世話をさせてもらって大分自閉症というものが分かってきました。受入れてもらう段階から難しいですよ。あの子達とお付き合えるには常に感情を同調させなければならなと思ったので、分からない時は、



先生に助けを求めてアドバイスをいただいたりもしました。第一目で、体育館へ行って遊んだ時、S君やDちゃんと気持ちがあひたり合ったのが分かった時、単純な遊びがとても楽しく感じられました。それに笑った顔がなんてかわいらしいんだろうか……!

あと不安を感じた時、お腹がすいた時、機嫌の悪い時などの一人一人の表現の仕方はとても興味深く感じられました。素直な反応がこっちは喜びにも悲しみにもなっていて伝わってきました。

とにかく、このキャンプは私によい体験を与えてくれました。参加してよかったです。「のびろ学園」の子達に機会があったらまた会いたいと思います。

(袖ヶ浦市在住)

嬉泉の出来事

出口理事葛飾区長に

見事当選!!

去る、九月六日(日)に行われました、東京都葛飾区長選挙において、東京都議会議員であり、当法人の理事を努めておられます、出口晴三先生が、めでたく御当選なされました。

当法人とのお付き合いは、須藤祐司理事長のご紹介により、昭和六十二年九月に理事に就任された頃より始まりました。そして、現在まで、当法人のためにいろいろとご尽力頂いております。

地域に密着した活動をされて来られた出口先生の、今後のますますのご活躍をお祈りいたしたいと思います。

(小池)

第九回自閉症実践療育

セミナーの開催

嬉泉では、昭和六十年より年に二回「自閉症治療教育セミナー」を続けてきました。私たちの自閉

症児・者に関わる処遇内容を内外に理解してもらうため、また、法人および施設のオープン化の一環としてこのセミナーを企画し、ひいてはわが国の自閉症療育の向上に貢献できることを念じて継続してきました。

今年は、このセミナーを企画するにあたり、内外の情勢を考え、また、今後本セミナーを少しでも組織的に発展させていくことを願って、全国社会福祉協議会・障害福祉部に問い合わせを行ったところ、これに賛同して下さり同協議会・心身障害児者団体連絡協議会との共催が決定しました。この共催を契機に本セミナーが福祉における援助サービスの基本として関係者の間により広く浸透していくように願っております。

今年のセミナーでは、社会福祉施設職員、養護学校を中心とした教育関係者、さらに相談機関などの参加者に加え、三〇〇名を越える参加者を数えました。

今回は、「自閉症児者の見えないう心を見る」というテーマで自閉症児者への援助技法について、講義とビデオの分析を通して、援助者の内面に起こる問題に焦点を当てました。特に自閉症児者とその援助者との間のノンバーバルなコミュニケーションを重視し、その両者の関係の変容に焦点を当てた事例検討と、嬉泉が実践している「受容的交流療法」による強度行動障害の事例検討を行い、会場からの意見、質問にも対応しながらノンバーバルなサインの理解の仕方と援助について考えました。

セミナーの内容の詳細は「月刊福祉」十二月号に発表致しますのでご参照ください。(春原)

「テニス・バスケット

ボール兼用コート完成」

私たちの長い間の夢であったコートがとうとうできあがりました。総面積六百七十平米、テニスとバスケットボールが楽しめる兼用コートです。十月十四日石井所長を迎え、袖ヶ浦のびろ学園・袖ヶ浦ひかりの学園のお子さんや利用者、多数の保護者、職員の参加をえてにぎやかにコート開きが行われました。



鮮やかなグリーンとレンガ色に塗り上げられたハードコートは、秋の陽ざしに美しく映えています。総工費およそ八百万円、その大半は袖ヶ浦ひかりの学園利用者の保護者、荒井恒夫氏のご寄附によるものです。ここにあらためてお礼申し上げます。

スポーツがもたらす効果は、自閉症の人たちにとっても同様に期待できると思います。コートを思い切り走り回ることを通して、身体を動かす喜びや楽しさを覚え、新しい交流が生まれることを願っています。(中塚博勝園長)

ひかりのタイムス

独立第17号

袖ヶ浦のびろ学園

あけぼの組利用者

インタビュ

*このインタビュは、担当主任の川相豊子先生があまり喋れない利用者の代弁を致します。

平岡良一君インタビュ

川相「平岡君の趣味は、ワープロを打つ事です。」

平岡「シャープのワープロ」(インタビュ中独言が多い。)

平岡「八木沢駅・東海道本線」

川相「お絵描きとか、クレージュを作るのをやります。」

山岸「いつからワープロをやっているんですか。」

川相「二年前から、やるようになった。ワープロで打った紙は家に持ち帰っている。」

山岸「平岡君がワープロを好きな理由は？」

川相「さあね〜どうでしょうか」



山岸「感覚的に印刷される瞬間に出て来ると音がピーピーと鳴る。しかも便利に自分が書きたい事が印刷されてスムーズに紙に表現出来て完成する。操作方法覚えれば楽に操れる便利な機械だから、やりやすい。」

川相「そうね〜ワープロで自分の言いたい事思っている事を表現出来れば、もっと人とのコミュニケーション」

シヨンは上手に出来ると思うけれど...」

(袖ヶ浦のびろ学園利用者)

竹内裕克君インタビュ

川相「竹内君は、のびろ食堂の椅子の上げ下ろしをされていてした後お茶を飲んで一服する。掃除が終わると『竹内君いますか』と電話がかかり、本人もニコニコしていく。本人のいきがいにあっていて三食の上げ下ろしをキチンとやっている。」

食堂も利用者に手伝ってもらうと助かるので双方の思惑がピッタリしている。」

山岸「他のあけぼのの利用者は、どう余暇を過ごしているのでしょうか。」

川相「安斎君はゴミ捨てが好き。易田君は、掃除をキチンとするのが好き。浅野君は、雑誌を束ねるのが好き。河野君は色を混ぜるのが好き。」

山岸「日曜日は何をしていますんですか。」

川相「ドライブなんかに行き、パークを楽しくむひとも入れれば、地域の子供会に参加している人もいます。缶潰しをしたりしていたり、



親と買い物したりしている人もいます。」

山岸「二週間程度の休みの時は、何をして過ごしているんですか？」

川相「家でゴロゴロ過ごす方が、落ち着く人もいれば、旅行に行きたいともいます。」

(袖ヶ浦のびろ学園利用者)

*このインタビュはのびろ食堂で行われましたが、みなさんインタビュを聞いていて、飽きて来たのか、川相先生がジュースを御馳走する。それから食堂を退散する。

高島平五丁目福祉園見学 とインタビュ

酒井園長インタビュー

インタビュアー 山岸 裕

山岸「グループホームは、やるんですか。」

酒井「生活寮という形でやりたい。身辺自立・人間関係がスムーズにいく事・金銭管理・などが出来るようにしたい。板橋区の方針で生活寮で自活して、授産所なり職場に通う。生活実習施設・授産所ともに生活寮を法人が運営する。」

それから、緊急一時保護(出産・法事・親の都合で面倒見れない場合)で福祉園が預かることにしている。」

山岸「生活実習施設とは、何ですか。」

酒井「生活を援助する施設です。」山岸「なぜ一階にエレベーターがあるんですか。」

酒井「肢体不自由のひとの乗り降りの為です。」

見学の感想

山岸 裕

全体的に明るい。肢体不自由・知的障害・視覚障害のひとたちが



いる施設だから職員が孤軍奮闘して利用者が阿鼻叫喚しているのをイメージしていたが、保育園的雰囲気がある。

指導者の金沢氏の過去の実践で得たノウハウと気力と情熱に私は圧倒された。肢体不自由であろうが視覚障害であろうが、偏見で見ることなく人格を持った人間として尊重する。なかなか出来ない事だ。職員室は広い。千葉や子研の狭いオフィスに比べるとゆとりがあり仕事しやすいオフィスだ。

指導そのものはインタビュで聞いた通りです。利用者がのびのびしているなと感じた。

丁度九月の誕生会で、女子職員がパフォーマンスをしたり、して行事の雰囲気職員側が盛り上げているなと感じた。

一番びっくりしたのは、誕生会でケーキを食べる時知的障害のひとが「ケーキおいしいね」と言った一言である。われわれ自閉症は私も含めて食べる時黙々と食べるから、「おいしい」という情緒的表現をしない。一種のカルチャーショックがした。

良く言えば純粹無垢で、人なつこい。個人主義の自閉症者とは違う暖かみを感じた。

訓練室がもうひとつあるが、(一階の実質的な指導室の隣にある。)私が取材にいった時は、作業指導はやっていなかった。

利用者たちはどんな思いでここにかよっているのだろう。それが気になった。

とにかく「百聞は一見にしかず。」である。高島平五丁目福祉園の皆様へ、取材に協力に感謝いたします。

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)

編集後記

このひかりのタイムズでは、利

用者の山岸が編集長で、企画・取材・撮影を一人でやっています。

広報責任者の友田がアドバイザーとして二人三脚でやっています。

今回の特集は余暇P・ATA3で高島平五丁目福祉園やのびろで、取材した記事を掲載いたしました。

特に、高島平五丁目福祉園では、千葉から出張取材で、酒井園長や金沢先生にインタビュしたり、見学したりして有意義でした。

のびろでは引き続き、あけぼの組の利用者に担当の川相先生が通訳してインタビュをしました。

企画・撮影・取材に知恵を絞り工夫して編集長としての責任を果たしました。余暇を三回特集して感じるの、みんなそれぞれ自分なりの趣味の世界を持っている。

人と一緒にやる遊びより、自分だけで出来る遊びをやるひとが多いなあと感じました。いわゆる身体障害者は独特のハンディがあって余暇の過ごし方も大変だなあと感じました。高島平五丁目福祉園での感想は、ひかりのタイムズに載っています。

このひかりのタイムズでは、インタビュしたグループの担当の主任に原稿を渡してチェックしています。